

以尾拍壁、女恐明日白於大德、大德住_二在生馬山寺_一、而告之言、汝不得_レ免、唯堅受_レ戒、乃令_二受持三帰五戒_一、然還來道、不知老人、以_二大蟹_一而逢、問之詎老、乞蟹免_レ吾、老答、我振津国兔原郡人、尽問遐邇麻呂、年七十八、而無_二子息_一、活_レ命無_レ便、往_二於難波_一、偶得_二此蟹_一、但有_二期人_一、故汝不得_レ免、女脱_レ衣贖、猶不免_レ可_レ得_レ脱_レ墓贖、老乃免之、然蟹持更返、勸_二請大德_一、呪願而放、大德數言、貴哉善哉、彼八日之夜、又其蛇來、登_二於屋頂_一、拔草而入、女悚慄焉、唯床前有_二跳_一爆_二之音_一、明日見之、有_二一大蟹_一、而彼大蛇、条然段切、乃知、贖放_二解報_一恩矣、并受_レ戒之力也、欲_二知_二虛實_一、問_二于耆老_一、姓名遂無、定委、耆是聖化也、斯奇異之事也、

己作_レ寺用_二其寺物_一作_二牛役緣_一第九

大伴赤麻呂者、武藏国多磨郡大領也、以_二天平勝宝元年己丑冬十二月十九日_一死、以_二二年庚寅夏五月七日_一、生_二黑斑贖_一、自負_二碑文_一矣、探_二之斑文_一、謂、赤麻呂者、壇_二於己所_一造寺、而隨_二恣心_一、借用_二寺物_一、未_レ報納之、而死亡焉、為_二贖_一此物_一故、受_二牛身_一者也、於_二茲諸眷屬及同僚_一、発_二慚愧心_一、而慄_二無_レ極_一、謂、作_二罪可_レ恐_一、豈心_二無_レ報_一矣、此事可_レ録_二季葉楷模_一、故以_二同年六月一日_一、伝_二乎諸人_一矣、冀_二無_レ慚愧_一者、覽_二乎斯録_一、改_二心行_一善、寧_二飢苦所_一迫、雖_二飲_二銅湯_一、而不_レ食_二寺物_一、古人諺曰、現在甘露、未來鉄丸者、其斯謂_二之矣_一、誠知、非_二無_レ因果_一、不_レ怖_二慎_一歟、所以大集經云、盜_二僧物_一者、罪過_二五逆_一云々、

3 堅_レ采_一堅4 令_レ采_一全5 詎_レ采_一誰6 還_レ采_一ナシ7 呂_レ采_一石8 便_レ采_一使9 復_レ采_一後10 脱_レ采_一境11 爆_レ采_一爆12 老_レ采_一宛1 而_レ采_一ナシ2 録_レ采_一報3 業_レ采_一業4 寧_レ采_一寛5 飲_レ采_一飲6 謬_レ采_一説7 歟_レ采_一歟常鳥卵煮食以現得_二惡死報_一緣第十

和泉国和泉郡下痛脚村、有_二一中男_一、姓名未_レ詳也、天年邪見、不_レ信_二因果_一、常求_二鳥卵_一、煮食為_二業_一、天平勝宝六年甲午春三月、不_レ知_二兵士_一、來告_二中男_一言、国司召也、見_二兵士腰_一、負_二四尺札_一、即副共往、纔至_二郡内_一於_二山直里_一押_二入_一麦畠、々々一町余、麦生_二二尺許_一、眼見_二燭火_一、踐足無_レ間、走_二廻_一畠内、而叫哭曰、熱哉々々、時有_二当村人_一、入_二山拾_一薪、見_二於走_一転哭叫之人、自_二山下来_一、執之而引、拒不_レ所_レ引、猶強追捉、乃從_二離_一之外、牽之而出、隣_二地而臥_一、嘿然不_レ言、良久蘇起、然病叫言、痛足矣云々、山人問言、何故然也、答曰、有_二一兵士_一、召_二我将来_一、押_二入_一燭火、燒_二足如_一煮、見_二四方_一者、皆衝_二火山_一、無_レ間_二所_一出、故叫走廻、山人聞之、囊_二袴見_一膊、々々肉爛、其骨壞在、唯逕_二之一日_一而死也、誠知、地獄現在、応_二信_一因果、不_レ可_レ如_二鳥_一、鳥慈_二己兒_一、而食_二他兒_一、無_レ慈悲者、雖_二人如_一鳥矣、涅槃經云、雖_二復_一人獸尊卑差別、宝_二命重_一死、二俱無_レ異云々、善惡因果經云、今身燒_二煮_一鷄子、死墮_二灰河地獄_一者、其斯謂_二之矣_一、

1 天_レ采_一其2 札_レ采_一於3 牽_レ采_一事4 囊_レ采_一塞5 唯_レ采_一准6 復_レ采_一得7 獸_レ采_一教8 其斯謂_二国_一其斯謂_二來_一斯謂_二一_一其謂罵_二僧与_一邪姪得_二惡病_一而死緣第十一

聖武天皇御世、紀伊国伊刀郡奈原之狹屋寺、尼等発_二願_一、於_二彼寺_一備_二法事_一、請_二奈良右京藥師寺僧惠惠師_一、字曰_二依綱_一、俗姓依綱_二、故以為_レ字_一、奉_二仕_一十一面觀音_二悔過_一、時彼里有_二一

1 刀_レ采_一力2 綱_レ采_一堀

擅^{はたら}にして、恣^{はたら}なる心に随^{したが}ひて寺の物を借用^{かりと}て報^{はら}い納^めめずして死^し亡^ぬ。此の物を償^{つぐ}はむが爲^{ため}の故^{ゆゑ}に牛の身を受^うくるなり」といふ。茲^{ここに}に諸^{もろ}の眷^{けん}屬^{りやう}と同^{どう}儕^{せい}とし。慚^は愧^{かい}づる心^{こころ}を發^はして、慄^{おそ}るること極^きり無^なくして、謂^いはく「罪^{つみ}を作^{つく}ること恐^{おそ}るべし。あに報^{はら}無^なかるべけむや。此の事^{こと}季^すの葉^はの楫^か板^{ばん}に録^{しる}すべし」といふ。故^{ゆゑ}に同^{どう}じき年^{ねん}の六^む月^{げつ}の一日^{いちにち}に諸^{もろ}人に伝^{つた}ふ。冀^{こひねが}はくは、慙^は愧^{かい}無^なき者^{もの}斯^{ひよこ}の録^ふを覽^みて心^{こころ}を改^{あら}め善^よを行^なひ、むしろ飢^うの苦^{くるしみ}に迫^おめられ銅^{どう}の湯^ゆを飲^のむとも、寺^{てら}の物^{もの}を食^くまされ。古^{いにし}人の諺^{ことわざ}に曰^いはく「現^{いま}在^{ざい}の甘^{かん}露^ろは、未^み来^{らい}の鉄^{てつ}丸^{がん}なり」といふは、其^それ斯^これを謂^いふなり。誠^{まこと}に知^しる、因^{いん}果^が無^なきにあらず、怖^{おそ}り慎^{つし}まざらむや、と。所以^{ゆゑ}に大^{だい}集^{しゆ}經^{きやう}に云^いはく「償^{つぐ}の物^{もの}を盜^{ぬす}むときは、罪^{つみ}五^ご逆^{ぎやく}に過^すぐ」とのたまふ。

常に鳥の卵かひこを煮て食ひて現うつに恵あしき死の報むくいを得る縁ことのもよ

第十

和泉郡下痛岡村に、一の中男有り。姓名詳ならず。天年邪見にして因果を信はず。常に鳥の卵を求め、煮て食ふことを業とす。天平勝宝六年甲午の春三月に、知らぬ兵士来りて中男に告げて言はく「国司召すなり

といふ。兵士の腰を見れば四尺のれを負ふ。すなはち副ひて共に往き、^二纒^ひ郡^のの内に山直里に至れば、麦畠に押入らる。畠一町余に麦二尺ばかり生ふ。眼には燐火を見、足を踐むこと間無く、畠の内を走廻りて叫び哭きて曰はく「熱きかな。熱きかな」といふ。時に当村の人有り。山に入りて薪を拾ふ。走り転りて哭き叫ぶ人を見て山より下り来り、執りて引く。拒みて引かれず、なほ強ひて追ひ捉へ、すなはち籬の外より牽きて出す。地に踞れて臥し、嘿然して曰はず。良久にありて簾り起き、然うして病み叫びて言はく「痛、足」といふ。山人問ひて言はく「何故ぞ然りする」といふ。答へて曰はく「^一の兵士有り。我れを召して将て来りて燐火に押入る。足を焼くこと煮るが如し。四方を見れば、みな火の山に傳まれ、出づる所の間無し。故に叫び走り廻る」といふ。山人聞きて袴を褰げ膊を見れば、膊の肉爛銷り、其の骨環在る。ただ一日を巡て死ぬ。誠に知る、地獄は現に在り因果を信ふべし、鳥の如くあるべからず、鳥は己が兒を慈ひて他兒を食ふ、慈悲無き者は人なりといふとも鳥の如し、と。涅槃經に云はく「また人と獸との尊と卑との差別ありといふとも、命を宝ひ死を重ることは一俱に異なること無し」とのたまふ。善惡因果經に云はく「今の身に鵝の子を燒煮は、死にて阇河池^二地獄に墮ちむ」とのたまふは、其れ斯

一のつゝるべき型。模範。通説では「かたきさ」型木の意。「き」が木の意であるかいなか、再考の余地がある。二本説話には日時が詳細に記述されている。すでに文書となっていたものに詳細な日時が記載されていたのであろう。原文「故以同年六月一日」と伝ふ諸人に欠。上巻三十縁の「頭録蓮花在世」と同様、文書にされてひるめられたのであろう。日本感鑑書には録・頭録・験之鏡とみえる。幸には、仏や寺の列録、功德の出来事を記録し告知する紙か札板がはられたり懸けられていたか(辻英子)。三本説話。上文にみえる六月一日の文書ではない。四上巻三十縁は經の文として同文を引用。本説話と上巻三十縁とに因果心報の実例を記した文書が登場する、という共通の性格より推測すればこの文は、それらの文書に記された定型句であつたであろう。↓上巻三十縁。五諸經要集・思慎部・慎過縁所引の大集経・濟龍品のごとき本文(大方等大集経・地藏分三佈濟龍品の本文とは異なる)の取意。本説話の引用文と同文のもの、六諸經吉迦記・下本に「大集」として引用。

第十緣 惡業についての現報說話。今昔物語集・二十ノ三十に書承。

六 大府府東大津市。セ戸令によれば十七歳以上二十歳以下の男。へ七五四年。九木簡(東野治之)。四尺の長さ、は異様だが、後代の絵画や彫刻において実高が長尺の木簡を持った姿に表現されていることが、東野治之の之によって指摘されている。冥界からの使者が文書を所持していた例に、金剛般若経集論記・延寿篇所引金剛般若経靈驗記・曇首文簿・文帳、伝記、一二四所引報心録・主簿文符簿、同、三八一所引法異記・表簡(薛薩蘭帖)、がある。二〇郡内に

到着して山直里に到着するとすぐに、妻島に押
 し入れられた。「焼」は、「一」すると同時に、の
 意。原文焼至、直内於「山直里」こ。まず大地域
 について記述し、その一部分である小地域につ
 いて細述する。後代の和文に「一に一」として
 「一」を重ねた表現がみえるが、その源流に位置
 する表現と考えて、ここでは「一に一」と訓讀
 する。一岸和田市。二原文「眼直、燭火」とは、
 効果的な説話展開という観点からいえば、この
 箇所には不要。一三郎を食した者が冥界で焼き
 苦しめられる例に、罪業心録教化地獄録、法苑
 珠林・十善傳・殺生源・修定善所引冥報地獄傳・育
 士望・広記・二三所引玉泉子孫季負の例があり、
 冥界ではなくこの世で焼き苦しめられる例に、
 冥報記下・冀州小児がある。本来は冥界での
 刑罰として伝承されたものである。本説話に
 は冥界とのむすびつづきが明示されないが、下文
 に「地獄現在、応」言因果」とみえる。
 二あ、足。本説話は村名の起源説話の性格
 をも有したか。一三中男の眼に映した事実が述
 べられる。二天鳥郎が受けたのと、同じ苦を、中
 男は受ける。ここでは焼と「煮」とが区別され
 ている。「煮」は名義砂では、ニル・イル、ヤク
 などの訓があり、調理用語というべきであろう。
 焼は調理用語とはえない。二三郎を食した
 者が焼き苦しめられる、という刑罰は「地獄」で
 受ける罰である、冥界で受ける罰である、とい
 う前提での記述。上文の「二天年取見、不」言因
 果」と合わせて考えるならば、本来ならは死後
 に地獄で受苦するはずが当人が因果を信じなか
 ったために受苦の時期を早めて現在世で受苦し
 た、という説話として本説話が解されていたら
 考えられる。冥界での受苦ではなくこの世での
 受苦として述べられている冥報記下・冀州小児

れを謂ふなり。

僧を罵ると邪姪とをもちて患しき病を得て死ぬる縁

第十一

聖武天皇の御世に、紀伊国伊刀郡桑原の狹屋寺の尼等願を発し、彼の寺に法事を備へ、奈良の右京の薬師寺の僧題惠禪師を請へ字は依綱禪師と曰ふ。俗姓依綱連なり。故に以ちて字とす、十一面観音に奉仕りて悔過す。時に彼の里に一の凶しき人有り。姓は又忌寸なり字は上田三郎と云ふ。天骨邪見にして三宝を信はず。凶しき人の妻上毛野公大椅の女有り。一日一夜に八の斎戒を受け、悔過に参行きて衆の中に居る。夫外より家に帰りて妻無きを見、家の人に問ふ。答へて曰はく「悔過に参往けり」といふ。聞きて瞋怒り、すなはち往きて妻を喚ぶ。導師見て、義を宣て教化ふれども信受けずして曰はく「無用語して、汝吾が妻に婚ふ。頭割ち破らるべし。斯下しき法師なり」といふ。悪口し多く言ふこと具に述ぶること得ず。妻を喚びて家に帰り、すなはち其の妻を犯せば密爾に闇に蟻着きて嚼み、痛み死ぬ。刑を加へざれども、患しき心を発して濫しく

罵りて恥ぢしめ邪姪を恐りざれば、故に現報を得るなり。口に舌の舌生ひ万言を白すといへども、憤憤を誹ることなかれ。條に災を蒙るが故なり。

蟬と蝦との命を贖ひ生を放ちて現報に蟬に助けらるる縁

第十二

山背国紀伊郡の部内に、一の女人有り。姓名詳ならず。天年慈ぶる心ありて種く因果を信ひ、五戒と十善とを受持ちて生物を殺さず。聖武天皇の代に、彼の里の牧牛の村童山川の蟬を八取りて焼き食はむとす。是の女見て、牧牛に勧へて曰はく「幸願はくは、此の蟬を我れに免せ」といふ。童男辞否びて聴さずして曰はく「なほ焼き食はむ」といふ。慇に誂へ乞ひて衣を脱きて買ふ。童男等すなはち免す。義禪師を御請へて呪願せしめて放生つ。然りして後に山に入り、太蛇の大蝦を飲むを見る。太蛇に誂へて言はく「是の蝦を我れに免せ。多くの帛を略奉らむ」といふ。蛇聴さずして呑む。女帛帛を募りて禱りて曰はく「汝を神として祀らむ。幸乞はくは我れに免せ」といふ。聴さずしてなほ飲む。また蛇に語りて言はく「此の蝦に替りて吾れ汝が妻と為らむ。

は、本説話とは前提が異なり、かえつて本説話からは遠い。一、未詳。二、大般涅槃經、梵行品。梵網經古迹記、下本。

第十一縁 今昔物語集、十六ノ三十八に書承。

一、妻が八斎戒を受持している期間中に、交わつたことをいう。阿毘達磨俱舍論、分別業品、大智度論、十二などの理解と一致。二、和歌山県伊都郡(伊都)かつらぎ町佐野(佐野)に所在。佐野庵寺跡がその地とされる。三、未詳。本説話以外に所伝をみない。四、本説話に描かれた時よりも少しのちの天平勝宝四年(宝勝)、実忠によつて東大寺二月堂に十一面観音母過がはじめられて(東大寺要録、四)。現代に二月堂の修二会(修二)として遺存。五、名未詳。字の上田は地名、橋本市あたり。本説話以外に所伝をみない。六、文忌寸材満(住吉大社神代記)の子孫の一族か。七、未詳。本説話以外に所伝をみない。八、若くは能於半月半月、或第十四日、或第十五日、受持斎戒、如法清淨、繫心於我、誦此神呪、便於生死、超四万劫、二十一面神呪心經。斎戒を受持して呪を誦すならば四万劫の生死を超え、と述べられる。一日一夜と明記するのは十一面観自在菩薩心密言金剛薩埵經、上。この縁は空海によつて將來されたもの。聖武天皇の御世には、まだ將來されてはいない。九、八斎戒は在俗の仏教信者の一日一夜に守る戒。内容に関しては諸説があるが、阿毘達磨俱舍論、分別業品に「八所止、離としてあけられてゐるのは、殺生、不与取、非梵行、虚誑語、飲諸酒、塗香、鬘、華、歌舞、觀聽、眠坐、高広、麗床、坐食、非時食、である。一、儀式の主たる役職にちなう僧。二、これは題惠禪師。三、斯下二合、賤(二国会図書館本調製)。大般涅槃經、迦葉菩薩品にみえる「斯下之人」は、大正新脩大藏經の校異によれば、宋本、旧宋本では「斯下之人」。撰集百緣經、五にも「斯下之人」。二「闇」は「闇」の俗字。女性生殖器を「闇」とするのに対して男性生殖器をいう(箋注倭名類聚抄、南方熊楠など)。二、十一面観世音神呪經の呪では、十一面観音への呼びかけは「南無阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩」とされ、後代の梵經鈔四十四でも十一面観音の梵名は南無阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩(南無阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩)とされ、聖者の意の「阿利耶」「阿利也」が冠せられた語形が用いられる。アリア、と唱えただで蟬が救いに現われた、という説話か。

第十二縁 本朝法華驗記、下、二三、今昔物語集、十六ノ十六、などにみえる觀音多寺(紙幡寺、觀音寺)草創説話は、類話ではあるが直接の關係は無い。

三、京都市。三行基の登場する説話で、女人が重要な役職をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、二十九縁、三十縁。二、中巻八縁。三、將來に善果をもたらす十種の善業。十恵に対していう。項目には諸説があるが、法界次第初門、上ノ上によれば、不殺生、不偷盜、不邪淫(以上三種は身業)、不妄語、不阿舌、不惡口、不綺語(以上四種は口業)、不貪欲、不瞋恚、不邪見(以上三種は意業)。法界次第初門、上ノ上は、それぞれを「止」と「行」とに分ける。たとえば、不殺生の止善は殺生の惡をやめること、行善は放生の善をおこなふこと。五戒と十善とは項目の上では重複がある。二、不殺生の止善。三、未詳。上巻八縁にも同じ語がみえる。六、不殺生之行善。一、羽二重(箋注倭名類聚抄)。帛説文云、帛、薄角反、